

〔研究ノート〕

オーストロ・マルクス主義

——その略史と文献——

内 田 忠 男

オーストロ・マルクス主義は、マルクス、エンゲルスの諸理論を政治、経済、哲学そして法の諸領域の問題の解明に適用して、一連の輝かしい理論的成果を生みだしていた、オーストリア社会民主労働者党（以下SPÖと略記）に結集する若い社会主義知識人の思想的理論的営みを指すものとして、1900年代に用いられ始めたが、マルクス主義のいわば「第三の世代」のオーストリア版であった人々が第一次大戦後 SPÖ の指導部を構成し、同時に学派としての統一を失うに至ると、この用語は拡大・転用されるようになる。ブルジョア陣営は、「隠蔽されたボルシェヴィズム」の意味で用い、コミンテルン、オーストリア共産党（以下KPÖと略記）は、社会改良主義を革命的言辞でつつみかくす、社会民主主義の亜種を示すものとして利用した。しかし、左右の蔑称として用いられたばかりではなく、20年代以降は SPÖ 内でも、社会民主主義諸政党のなかで独自の、左派的理論・姿勢をとっている党を総体としてよぶ用語として認めて、使うようになった。

この稿では狭い、思想的学派としてではなく、広い運動体を示すもののオーストロ・マルクス主義を追うこととしたい。

(i) 「オーストリア革命」まで (1867—1918)

1867年結社の自由が認められウィーンで労働者教育協会が、74年には SPÖ

が創立されたが、ラサール派、アイゼナハ派の対立が激しく、組織は名ばかりだった。78年ドイツの「社会主義者鎮圧法」の影響で運動は停滞し、J.モストの無政府主義の煽動によるテロル活動は84年ウィーンの戒厳令布告をまねいて、労働者の組織・出版活動は崩壊した。

沈滞した運動に活気を与え、「急進派」、「穏健派」の対立をほぐして労働者運動を統一するのは、「社会主義とは健康権だ」と、ヒューマニズムに燃えて実践活動に身を投じてきたV.アドラーだった。彼は88年ハインフェルトで両派の主張を折衷した綱領を採択させて党を再建した、がすでに民族問題は「火中の栗」で、大会は民族特権に反対する闘いは搾取に反対する闘いと同様国際主義的なものでなければならないとするにとどまった。

90年代組織活動は順調に伸び、党と労働組合は、アドラーの表現によれば、「シャム双子」の関係、「車の両輪」として、労働者の労働条件、諸権利の改善のために動いた。またドイツで始まった「修正主義論争」も知的刺激となって、ウィーン大学の社会主義学生サークルからK.レンナー、M.アドラー、R.ヒルファディング、O.パウアーらがSPÖに結集して理論活動も活潑となる。20世紀初頭「マルクス研究」叢書、理論誌『闘争』が彼らの手で刊行され、経済学、哲学、民族問題、法学等の諸領域に、新カント主義的ではあるが、マルクス主義の分析のメスをいれた論考が発表されて、国際的注目をあび、彼らのグループはオーストロ・マルクス主義者という輝かしく、晴れがましいレッテルを受けることとなる。

97年選挙法が少し改善されて労働者代表の参加が可能となったが、民族問題は党の最大の問題となった。同権の諸民族連邦を要求するブリュン民族綱領の採択(99年)も効なく、チェコ労働者の独自組織要求は、チェコ党だけでなくチェコ人の労働組合承認にまで及び、1907年アドラーの卓抜した戦術で獲得した普通選挙も党内の団結を固めはしなかった。

党指導部は、レンナー、パウアーの「民族理論」と同様諸民族に文化言語共同体を認めはするものの、分離独立を否定する態度に固執した。彼らの姿勢の

背後にあるものは、「大ドイツ主義」であった。1914年8月開戦の日、党の機関紙『労働者新聞』は「ドイツ民族の日」と題した参戦肯定の論陣をはったが、それはこの「大ドイツ主義」の爆発的表現であった。レンナーは戦争の間の研究で、帝国主義的膨張政策を、社会主義的オータルキーを準備するものとして解釈するまでに進む。

開戦直後 SPÖ は「城内平和」を打出したが、戦争の長期化によって国民生活の深刻な窮乏化が進んで党内に不満がみち始め、アドラーの息子フリードリヒの、党指導部への抗議をもこめた、首相暗殺事件が16年に起ると、これを契機に広汎な平和、反戦の気分が党を次第に左へとおしやることとなった。

18年1月ストライキの波が全国を洗い、評議会運動や後にオーストリア共産党(以下 KPÖ と略記)となる左翼急進派が誕生する。この激流のなか、SPÖ は辛うじて労働運動の主導権を守り、10月チェコを始め諸民族が分離独立していった後、「オーストリア臨時国民議会」の中心として事態の収拾に当り、11月共和国発足には首相にレンナーを送った。そして「ドイツとの併合」を実現する要として、外相にパウアーを据えた。

(ii) 「連合政権」の時代 (1919—1920)

1918年11月共和国発足時の国家評議会、19年2月選挙後のキリスト教社会党との連合政権でも SPÖ は権力の主要な部署を独占していたし、議会外では強力な労働者評議会、人民軍を牛耳っていた。3月にはハンガリー、4月にはバイエルンで労兵評議会国家が両脇を守るかのように成立した。権力掌握をはばむ障害物はなかった。問題は SPÖ の姿勢だった。

労働者評議会議長であった F. アドラーは、オーストリアは食糧難のため連合国の奴隷であり、ハンガリーの例には倣いえないと、ベラ・クンにこたえ、労働者評議会の理論家となっていた M. アドラーは農民層が強力だからオーストリアでは社会主義は不可能であり、評議会国家は成立、存続しえないと、労働

者大衆を説得していた。評議会国家を要求する KPÖ 系のデモには、軍事部門を掌握していた J. ドイツュは人民軍を投入して勢をそぎ、秩序回復を至上命題とした。

経済面では、残余国オーストリアの混乱の収拾、将来の見通しを、レンナー、ことにパウアーは、ドイツとの併合に賭けていた。しかし19年9月サン・ジェルマン講和条約は併合を禁じ独立維持を求めたので、彼らの「社会主義ドイツ・オーストリア」の夢と幻想は瓦解し、パウアーは辞任、新しい途を模索せねばならなくなる。この間に両評議会国家は崩壊し反動的体制が成立したが、SPÖはこの事態を議会を通じての途こそ社会主義への平和的非流血的移行を約束するのだという自らの理論的主張を裏付けてくれるものとして利用し、民主主義路線を固めていった。パウアーは51%の得票即社会主義だとまで煽動して議会活動への期待を煽った。ソヴィエト・ロシアの例に対しては、ロシアのような広大な領土を持つ国とは異なる、狭隘なオーストリアでは、広い経済的空間を必要とする社会主義は建設困難であると切り返し、SPÖは1933年まで綱領にドイツとの併合要求を掲げつつけた。

KPÖ、急進的労働者層にはオーストリアの経済的社会的諸障害を列挙して鎮静を求めた SPÖ は、ブルジョア諸政党には「ボルシェヴィズムの脅威」でおどして譲歩を迫る政策に出て、50年間の運動で得られなかった多くの要求事項を一挙に短期間に実現した（8時間労働日、有給長期休暇、経営評議会、社会化法、失業保険法等）。

この手口は以降の SPÖ の対政府交渉の原型となったが、この力と成功は「左の脅威」や党の力が現実存在することに依拠する。両評議会国家の崩壊で KPÖ は急激に勢力を失い、政治生命を喪失する。外堀が一つ埋められた。

(iii) 「赤いウィーン」(1920—1926)

20年10月の選挙で SPÖ は10議席を失い、連合政権から離脱せざるをえなか

ったが、ウィーンと地方都市はなお党の牙城だった。連邦の一州となったウィーンは、H.ブライトナーの租税政策で得た歳入を、労働者向けの壮大な公共住宅建築、教育・保健・体育・文化諸施設の建築に投入し、「赤いモスクワ」に対抗する、社会主義労働者インターの「飾り窓」との地位を得、「赤いウィーン」と呼ばれた。O.グレッケルの教育改革事業が、地区図書館、社会教育施設の拡充が進められ、勤労者・青年・学生らの自主的な文化・教育・体育諸組織は、生活のさまざまな領域をカバーしていた。党組織では最高時には全国71.8万人のうちウィーンは42万人、58%を占め、ウィーンの成人人口131万人の、実に32%（男性では45%）を占めていた。

こうした強力な組織力、KPÖを政治的に無力にして労働者の統一した政党であることをバックに、SPÖはいわゆる「ウィーン・インター」＝「第二半インター」とよばれる「国際社会党行動同盟」結成（1921年2月）の中心となり、二つのインターの仲介役を買って出て、社会民主主義政党のなかで独自の、左派的存在を誇示した（23年第二インターと合併し、社会主義労働者インターとなって終った）。

しかしウィーンは、カトリック農民、小市民の「黒い海」に浮ぶ「赤い小島」にすぎず、革命の渦中で得た労働者の諸権利、福祉等は、政財界がオーストリアの構造的不況、生活難の原因だとする宣伝にあおられて、ウィーンの労働者市政は農民、小市民の憎悪のまともとなっていた。25年パウアーは農民各層の諸要求に配慮した「農業綱領」を作成し、党大会で承認させて彼等への喰い込みを図ったが、大勢を変えることは出来なかった。

この間KPÖは分派闘争に終始し、「労農評議会国家」要求もセクトの空文句を越えるものではなかった。

(iv) 「リンツ綱領」の成立から破産へ（1926—1934）

26年リンツで、パウアーがオーストロ・マルクス主義の精粹だと言う新綱領

が採択された。民主主義的手段、議会での多数の獲得によって権力を掌握し、不法な反撃には独裁的手段でもってこたえんとする理論的部分には、社会主義労働者インター左派の自負が、その独自性の主張が現われていた。党勢が頂点に達した時期であった。

23年結成され、集会や示威行進の秩序維持、労働者組織の防衛の任に当たっていた「共和国防衛同盟」は、SPÖの物理的力であり、武器を備えて、共和国の火急の用に役立つものと考えられていた。綱領は彼らの存在、「敵への威嚇」を計算していた。彼らと、カトリック的地主的反動の武装集団「護国団」との衝突、テロルの報復が次第に増えてきて、緊張した空気が国内に充ちた27年7月、同盟員を射殺した護国団員が無罪放免されたのに抗議して、ウィーンの労働者は自然発生的に露骨な階級裁判を糾弾するデモを敢行した。警官の発砲から司法省の焼打ちへと混乱が拡がると首相ザイベルは徹底的弾圧を命じ、死者百名に及ぶ悲惨事をつくりだした。党、労働組合が弾圧に抗議するゼネストを数日間全国に渡って行ったが政府の強腰をおらせることはできず、この事件は政府、ブルジョア諸政党それに「護国団」が、攻撃、攻勢へと移る大きな契機となった。これだけの弾圧に党が「共和国防衛同盟」の武装抵抗の発動を決断しえなかったのは、自ら「敵への威嚇」の手段をなげすめたことに等しかった。

SPÖは、反省として「共和国防衛同盟」を党指導部に直属する上意下達の純軍事的組織へと改組し、ファッショ団体の攻撃に対して労働者を守るだけでなく、労働者の「党の規律に違反する暴発的行動」にもそなえるものとしていった。

30年大恐慌の波及は、大戦後の構造的失業者の大群に更なる大群を加え（4人に1人が失業）、労働者の組織的力量、資本の攻撃に対抗する力は加速度的に減少していったが、政・財界に援助された「護国団」がオーストロ・ファシズムの尖兵として勢力を拡張し、農村から都市へと活動を展開してゆき、ナチズムが大恐慌で最もひどい打撃を受けた青年失業者、学生ら、都市の青年層をかきあつめてふくれあがるなかで、SPÖは失業者、低賃金に苦しむ労働者にただ議会活動による救済方法の案出、つまり選挙活動を提示するのみだった。反

資本、社会主義のスローガンは、ナチそしてKPÖの旗印となり、SPÖは現情況を打開する途を、「体制」を攻撃する明確なスローガンを掲げえなかった。SPÖの民主主義路線は、反動と反体制側の攻撃にはさまれて、孤立、後退、時期を待つ姿勢となる。

33年1月ヒトラーの政権掌握に続いて3月、首相ドルフスは議会排除、「戦時経済補立法」による統治へと民主主義破壊を強行したが、SPÖは、これに対して「リンツ綱領」の唱う「独裁」の手段、武力抵抗の途を、すなわち「共和国防衛同盟」の投入プラスゼネストの断行の途を選ばず、又「共和国防衛同盟」の解散命令にも抗せず、むしろ逆にナチスの脅威に備えねばならないと、首相ドルフスに「オーストロ・ファシズム体制=身分制国家」を時期を限って是認する提案を行ない、この政党との連合政権構想まで提起する。党内左派とKPÖはこうした行動を社会民主主義の政策的破産だけでなく、SPÖの原則、「リンツ綱領」の破産、否自己破壊だと攻撃、批判した。SPÖは最後の抵抗線として、党、労組、ウィーン市政、共和国憲法が攻撃され解散、解消させられる場合には、武力とゼネストで立ち上ることを、最後の党大会となった33年の臨時党大会で決定して公開し、政府への警告としたが無為であった。政府は「共和国防衛同盟」の武器の搜索、押収を全国的に行ない、挑発につとめた。SPÖ内では左右への分極化が進むとともに党勢は急激に衰頹していった。

34年2月リンツで、R.バルナシェクに率いられた「共和国防衛同盟」員の小グループが武器搜索に武力で抵抗し、党指導部に全国的呼応を求めた。右派のレンナーはなお連合政権に執着し、左派の支持を受けるパワーは躊躇のはて、ゼネスト指令・抵抗を決断したが、内的準備を欠いた武力抵抗とゼネストは、散発に終り、少数者の英雄的抵抗が何らの見通しも方針もなしに、「共和国防衛同盟」員を中核にして、数日間続いただけであった。

SPÖ、労働組合から労働者のスポーツ組織に至るまで労働者の自主的自律的組織は解散させられ、合法性それに財産まで奪われた。

しかしこの絶望的闘いは反ファシズム運動への一つの大きな狼煙となったと

言えよう。

(v) 非合法下の抵抗と「併合」(1934—1945)

無抵抗でファシズムに屈したドイツとは違って抵抗運動は早期に始まった。「2月」の中核であった「共和国防衛同盟」は、超党派の武装抵抗組織として自立した活動をはじめ、E. フィッシャーら SPÖ の「左翼反対派」の多くは KPÖ へ移行して抵抗運動を担った。SPÖ では、左派・青年層が旧党の名を捨て新たに「革命的社会主義者」(以下 RS と略記) を結成し、情宣・組織活動を展開する。チェコへ逃れたパウアー、ドイチュらは「在外事務局」を構成し、RS と連絡を保ちつつ、「第二ヴァイオリン」として国内外の抵抗運動に助力する情報収集・出版活動に活動を限定して歩み始める。

諸組織はいずれも当初は、「2月の弾圧者」の体制とのいかなるかかわりをも拒否するボイコット戦術を反ファシズム闘争のスローガンにしていたが、餓首、賃金差別のおどしでもって翼賛組織への加入を強要されて次第に労働者が翼賛新組合へ加わるようになると、KPÖ は、新組合を下から変えて労働者の諸要求を闘いとる組織にしてゆくべきだと「トロイの馬」戦術へと転換し、合法、非合法の両面を活用することを提唱する。他方 RS は「2月を忘れるな」と一貫して体制のボイコットの戦術に固執して変らなかった。

非合法下に再建された自由労組は、超党派組織として自立し、労働者更に広く国民一般の要求を掲げ、反ファシズムの抵抗を組織する責を担った。組合は数度ナチスの脅威に対して国民が統一・団結してオーストリアの独立を守ってたたかうべきだと政府に建議する署名運動を組織した、がしかし首相シュシュニクが労働者の声に耳を貸したのはベルヒテスガーデンでヒトラーの要求に身を屈してきた後でしかなかった。

反ナチ、反ファシズム、反併合の運動を国民的抵抗にまで高め盛り上げるために、KPÖ は37年、A. クラールの「オーストリア民族論」を発表し、「第二の

ドイツ民族」と自己規定してナチス・ドイツへの抵抗をためらう体制側を攻撃し、ナチスへの抵抗が国民・民族的課題であることを力説した。シュシュニクが「独立維持」に賛成か否かを問う、国民投票にナチへの抵抗の手段を見出したとき、KPÖは真先にヤーを唱えたが、RSは「34年2月の敵」に反対するとする姿勢をくずさず、ようやくヤーを決断するのは「併合」のまさに前夜でしかなかった。

「併合」が38年3月無血で行なわれたが、RSを含めてSPÖの指導者らは「併合」を「歴史的経済的必然事」だと肯定的に評価した。KPÖが「独立回復」のスローガンを提起すると、パウアーは「反動的逆行的」だと批判し、経済的困窮を運命づけられたオーストリア労働者はオーストリアに愛着を感じはしないとまで述べ、レンナーは自己の政治活動の夢が実現したと言う始末であった。33年併合要求を綱領から削除したのは一時的処置にすぎず、ドイツへ依存する姿勢、ドイツ主義の理念が、SPÖにいかにか根深いかは今一度示されたのである。

「併合」下の抵抗運動は、ナチスの徹底的弾圧とSPÖの理想的影響のマイナスもあって、極度に困難で孤独で犠牲の多い、ごく少数者の闘いではあったが、敗戦まで国の内外で進められた。この抵抗運動とナチスに率いられた戦争の悲惨さの経験が糧となって、オーストリアで国民的民族的意識が生まれ、又第二次大戦後の新たな労働者運動、社会主義の目標、路線が、労働者階級のそれぞれの組織のなかから創りだされていったのである。

文献解題

まず思想体制としてオーストロ・マルクス主義を概観させるものとして、

- ① (Hrsg. u. engl. v. Sandkühler, Hans-Jörg u. Rafael de la Vega), *Austro-Marxismus*. Wien, 1970.
- ② Leser, Nobert, *Zwischen Reformismus und Bolschewismus. Der Austromarxismus als Theorie und Praxis*. Wien, 1968.

社会運動としてオーストロ・マルクス主義を知る上で必要な文献を紹介する

ものは、

- ③ Steiner, Herbert, *Bibliographie zur Geschichte der österreichischen Arbeiterbewegung 1857-1918. Band 2:1918-1934. Band 3:1934-1945.* Wien, 1962, 1967, 1970.

オーストリア労働運動史の研究に社会経済史を結びつけようとした野心的な概史として、

- ④ Hautman, Hans u. Kropf, Rudolf, *Die österreichische Arbeiterbewegung vom Vormärz bis 1945. Sozialökonomische Ursprünge ihrer Ideologie und Politik.* Wien, 1974.

労働運動史研究の古典としては、

- ⑤ Brügel, Ludwig, *Geschichte der österreichischen Sozialdemokratie.* Band 1-5. Wien, 1922-1925.

二重帝国の崩壊まで扱っているだけだが、取りいれられている資料は重要である。

同様に戦前の労働組合運動史の先駆は、

- ⑥ Deutsch, Julius, *Geschichte der österreichischen Gewerkschaften von ihren Anfängen bis zur Gegenwart.* Wien, 1908.

なお同書は第一次大戦後、Käte Leichter らの協力で戦後まで加筆、拡大されて二巻本として刊行された。

Deutsch, Julius, *Geschichte der österreichischen Gewerkschaftsbewegung.* 2. Bde. Wien, 1929-32.

第二次大戦後までをカバーする詳細な労働組合運動史のスタンダード・ワークとして、

- ⑦ Klenner, Fritz, *Die österreichischen Gewerkschaften. Vergangenheit und Gegenwartsprobleme.* 2. Bde. Wien, 1953.

キリスト教社会党系労働組合運動の研究は通史的であるが、

- ⑧ Schwimmer, Walter u. Klinger, Edwald, *Die christlichen Ge-*

werkschaften in Oesterreich. Wien, 1975.

運動の初期に重要、重大な役割を演じた無政府主義運動については、

- ⑨ Botz, Gerhard, Branstetter, Gerfried u. Pollak, Michel, *Im Schatten der Arbeiterbewegung. Zur Geschichte des Anarchismus in Oesterreich und Deutschland*. Wien, 1977.

戦前期、第二次大戦後の SPÖ の正史と呼ばれるものはまだないが、KPÖ のものは、

- ⑩ *Geschichte der Kommunistischen Partei Oesterreichs 1918-1955*. Kurtzer Abriss von einem Autorenkollektiv der Historischen Kommission beim ZK der KPOe unter Leitung von Friedl Fürnberg. Wien, 1977.

労働者政党以外のものも含んでいるが、各政党の綱領をおさめているものは、充分なものではないが、今のところ、

- ⑪ (Hrsg. u. eingeleitet v. Berchtold, Klaus), *Oesterreichische Parteiprogramme 1868-1966*. Wien, 1967.

綱領、補足的綱領から、セクトの「テーゼ」まで幅広く収録している。

SPÖ の指導者、主要な活動家の伝記と著作等を知る上で便利なものとしては、

- ⑫ (Hrsg. v. Leser, Nobert), *Werk und Widerhall. Große Gestalten des österreichischen Sozialismus*. Wien, 1964.

文末に文献紹介 (著書、研究書) がある。

労働者政党創立期の研究書としては、

- ⑬ Steiner, Herbert, *Die Arbeiterbewegung Oesterreichs 1867-1889. Beiträge zu ihrer Geschichte von der Gründung des Wiener Arbeiterbildungsvereins bis zum Einigungsparteitag in Hainfeld*. Wien, 1964.

各地の労働者教育協会から労働者党が創立され、大会をもつまでの期間を扱

うものは、

- ⑭ Göhring, Walter, *Der Gründungsparteitag der österreichischen Sozialdemokratie. Neudörfel 1874*. Wien, 1974.

なお前後するが、1848, 9年の革命期の労働者運動、及びそれとのK.マルクスのかかわりを述べているのは、

- ⑮ Steiner, Herbert, *Karl Marx in Wien. Die Arbeiterbewegung zwischen Revolution und Restauration 1848*. Wien, 1978.

第一次大戦前 SPÖ を終始悩ました問題は、何ととっても民族問題であった。研究書も多いが大著としては、

- ⑯ Mommsen, Hans, *Die Sozialdemokratie und die Nationalitätenfrage im habsburgischen Vielvölkerstaat. I. Das Ringen um die supranationale Integration der zisleithanischen Arbeiterbewegung (1867-1907)*. Wien, 1963.

民族問題をレンナー、パウアーら「オーストロ・マルクス主義」の枠内だけでみるのではなくて、経済的側面からも考慮すべきだとするのが、次書であるが、チェコの研究者の、チェコの側からする労働組合運動の研究が収録されている。類書が従来ドイツ語ではないだけに重要であろう。

- ⑰ Konrad, Helmut, *Nationalismus und Internationalismus. Die österreichische Arbeiterbewegung vor dem Ersten Weltkrieg*. Wien, 1976.

民族問題への SPÖ の態度については、勿論レンナー、パウアーの著書は欠かせない。

- ⑱ Renner, Karl (Pseudonym: Wahrmond, Thomas), *Der Kampf der Oesterreichischen Nationen um den Staat. Erster Teil. Das nationale Problem als Verfassungs- und Verwaltungsfrage*. Leipzig & Wien, 1902.

- ⑲ Bauer, Otto, *Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie*.

Wien, 1907.

レンナー研究には

⑳ *Karl, Renner. Eine Bibliographie.* Zusammenestellt v. Hans Schroth. Wien, 1970.

㉑ Hannak, Jacques, *Karl Renner und seine Zeit. Versuch einer Biographie.* Wien, 1965.

パウアー研究には、現在刊行中の全集のほか、下記の三書の伝記がスタンダードだろう。

㉒ *Otto Bauer Werkausgabe.* Band 1-9. Wien, 1975-80.

㉓ Leichter, Otto, *Otto Bauer. Tragödie oder Triumph.* Wien, 1970.

㉔ Braunthal, Julius, „Otto Bauer, Ein Lebensbild“ in *Otto Bauer. Eine Auswahl aus seinem Lebenswerk.* Wien, 1961.

SPÖの指導者V. アドラーについては、

㉕ *Victor Adler. Aufsätze, Reden, Briefe.* Heft 1-11. Wien, 1922-1929.

㉖ Ermers, Max, *Victor Adler, Größe und Aufstieg einer sozialistischen Partei.* Wien, 1932.

彼の息子, Friedrich と合わせて書いたものとしては、

㉗ Braunthal, Julius, *Victor und Friedrich Adler. Zwei Generationen Arbeiterbewegung.* Wien, 1965.

SPÖの哲学者, 左派の代表者としてのM. アドラーについては最近研究が増えてきているが、

㉘ Schroth, Hans u. Exenberger, Herbert, *Max Adler : Eine Bibliographie.* Wien, 1974.

㉙ Heintel, Peter, *System und Ideologie. Der Austromarxismus im Spiegel der Philosophie Max Adlers.* Wien u. München, 1967.

㉚ Katsoulis, Ilias, *Sozialismus und Staat. Demokratie, Revolution*

und Diktatur des Proletariats im Austromarxismus. Meisenheim am Glan, 1975.

第一次大戦中の党内の諸潮流及び動向については、

③① Renner, Karl, *Marxismus, Krieg und Internationale. Kritische Studien über offene Probleme des wissenschaftlichen und des praktischen Sozialismus in und nach dem Weltkrieg*. Stuttgart, 1917.

③② Adler, Friedrich, *Die Erneuerung der Internationale. Aufsätze aus der Kriegszeit*. Wien, 1918.

③③ Adler, Max, *Klassenkampf gegen Völkerkampf! Marxistische Betrachtungen zum Weltkriege*. München, 1919.

③④ Neck, Rudolf, *Arbeiterschaft und Staat im Ersten Weltkrieg 1914-1918. (A. Quellen). I. Der Staat*. Wien, 1968.

「オーストリア革命」期の諸問題については、まずバウアーの古典的著作の外に、

③⑤ Bauer, Otto, *Die österreichische Revolution*. Wien, 1923 (1965).

革命の冷却化に役立てられた「労働者評議会」については、

③⑥ Reventlow, Rolf, *Zwischen Alliierten und Bolschewiken. Arbeiterräte in Oesterreich 1918 bis 1923*. Wien, 1969.

「社会化」については、もっぱら理論面に重点が置かれているが、

③⑦ Weissel, Erwin, *Die Ohnmacht des Sieges. Arbeiterschaft und Sozialisierung nach dem Ersten Weltkrieg in Oesterreich*. Wien, 1976.

革命の急進化の先頭に立ったが、非力で、少数者しかえられなかった急進派、KPÖについては、

③⑧ Hautmann, Hans, *Die Anfänge der Linksradikalen Bewegung und der Kommunistischen Partei Deutschösterreichs 1916-1919*. Wien, 1970.

兩大戦間の社会主義・労働者運動の歴史については、反省と批判を含んだ次の二著がある。前者は SPÖ 左派、後者はそこから KPÖ へ走った E. フィッシャーのものであるが、

③⑨ Leichter, Otto, *Glanz und Ende der Ersten Republik. Wie es zum österreichischen Bürgerkrieg kam.* Wien, 1964.

④⑩ Fischer, Ernst, *Erinnerungen und Reflexionen.* Reinbek bei Hamburg, 1969. 『回想と反省、文学とコミンテルンの間で』池田浩士訳, 1972.

「赤いウィーン」については、SPÖ の書記局の中心として任に当たった R. ダンネベルクの報告がある。

④⑪ Danneberg, Robert, *Das neue Wien.* Wien, 1930.

SPÖ の各種組織、団体の歴史のなかから青年組織のものだけをひろえば、

④⑫ Neugebauer, Wolfgang, *Bauvolk der Kommenden Welt. Geschichte der sozialistischen Jugendbewegung in Oesterreich.* Wien, 1975.

1934年2月に関しては、幾多の研究書、研究者集会議事録があるが、抵抗の中心となった「共和国防衛同盟」関係の研究も現われている。さしあたり、

④⑬ Reisberg, Arnold, *Februar 1934. Hintergrunde und Folgen.* Wien, 1974.

④⑭ Kykal, Inez u. Stadler, Karl R., *Richard Bernaschek. Odyssee eines Rebellen.* Wien, 1976.

④⑮ Stadler, Karl R., *Opfer verlorener Zeiten. Geschichte der Schutzbund-Emigration 1934.* Wien, 1974.

④⑯ Duczynska, Ilona, *Der demokratische Bolschewik. Zur Theorie und Praxis der Gewalt.* München, 1975.

オーストロ・ファシズム及びナチズムの下での抵抗運動とその過程での新たな「民族問題」論争の出現については近年研究が多い。

RS の運動では傾向が異なる二著が資料的でもある。

④⑦ Leichter, Otto, *Zwischen zwei Diktaturen. Oesterreichs Revolutionäre Sozialisten 1934-1938*. Wien, 1968.

④⑧ Buttinger, Josef, *Das Ende der Massenpartei. Am Beispiel Oesterreichs*. Frankfurt, 1953.

KPÖ も含めたものとしては,

④⑨ West, Franz, *Die Linke im Ständestaat Oesterreich. Revolutionäre Sozialisten und Kommunisten 1934-1938*. Wien-München-Zürich, 1978.

両ファシズム下の労働組合運動には,

⑤⑩ Hindels, Josef, *Oesterreichs Gewerkschaften im Widerstand 1934-1945*.

「民族問題」については KPÖ 側の提唱と、ドイツ民族との併合に固執する新旧社会民主主義者の論争があるが、研究書、資料としては,

⑤① Konrad, Helmut (Hrsg. v.), *Sozialdemokratie und „Anschluß“ . Historische Wurzeln Anschluß. 1918 und 1938 Nachwirkungen*. Wien, 1978.

⑤② *Das nationale Frage und Oesterreichs Kampf um seine Unabhängigkeit. Ein Sammelband*. Paris, 1939.

⑤③ Mitteräcker, Hermann, *Kampf und Opfer für Oesterreich Ein Beitrag zur Geschichte des österreichischen Widerstandes 1938-1945*. Wien, 1963.